

より多くの人に恩恵が届く 国際協力を目指したい



JICA経済基盤開発部
ジェンダー平等・
貧困削減推進室
後藤 菜穂
GOTO Naho

大学卒業後、青年海外協力隊、国際協力推進員(長野県)を経て、2004年にJICAに就職。JICA東京、ブラジル事務所、農村開発部を経て、2012年5月から現職。

男女の役割や立場の違いなどを考慮した国際協力を目指したい。JICA経済基盤開発部ジェンダー平等・貧困削減推進室の後藤菜穂さんは、JICAの全ての取り組みにジェンダーの視点が盛り込まれるよう奮闘している。

青年海外協力隊で 国際協力の現場を知る

農学部で学んでいた大学生の時、アメリカの大学に1年間交換留学し、農作物の病原微生物の診断や防除技術などを学びました。クラスには開発途上国から来た留学生もいて、自分たちの国の農業を良くするために何としても知識を得るんだと、必死に勉強していました。そんな彼らと触れ合ううちに、私も途上国の農業に貢献したいと思うようになりました。

卒業後、青年海外協力隊としてグアテマラの国立大学に派遣され、植物の病原微生物の診断方法などを学生に講義したり、同僚の先生と実験を取り入れた授業を考えたりしました。そこであらためて、現地に入り込み、そこに暮らす人たちと一緒に働くことにやりがいを感じたのです。帰国後も、引き続き国際協力に取り組みたいと思いついて、たどり着いたのがJICAでした。

ジェンダーの視点の必要性に 気付かされる

農村開発部に配属された時のことです。南米ボリビアの農家の生計向上を目指して事業を立ち上げることに、生産性を高める栽培技術の導入や、農作物の付加価値化などが検討されていました。しかし、日本人専門家の一人が「これではダメだ。

ジェンダーの視点がまったく入っていない」と指摘したのです。ジェンダー？正直、ピンときませんでした。男女の区別なく、農村の全ての人を対象にした協力を考えているつもりだったからです。

しかし、「農村での男性と女性の役割や立場を考慮しないと、適切な支援はできない」と言われて、ハッとしました。例えば農作業でも、田畑を耕すなどの力仕事は男性が、草取りや収穫後の処理などの細かい作業は女性が担うことが多い。またそれ以外にも、女性は水くみや調理など家事や育児もあります。こうした状況を理解しないまま支援をしても成果が上がりにくいのは明らかです。この時からジェンダーの重要性を意識するようになりました。

全ての人に届く 国際協力を目指して

JICAは途上国が抱える課題の解決に向けてさまざまな事業を実施しています。それぞれにもっとジェンダーの視点を取り込めば、より多くの人に恩恵が行きわたるはず。それを各事業の担当者に働き掛けるのが、現在の私の仕事です。

幹線道路の整備一つ取っても、そのインフラは男性と女性で異なります。例えば、「水くみや市場への移動で、毎日道路脇を歩いたり横断したりする必要があり、車が高速で通過すると危険」という声を女

性から聞くと、歩道橋や路肩幅の確保などのニーズが見えてきます。そういった状況を丁寧に把握することで、事業の成果をより高めることができるとのことです。

しかし、対象地域の状況や事業内容に一番詳しいのは担当者。彼らとじっくり

話をしながら、各地域のジェンダー状況の理解、各セクターでの事例収集に努め、提案するよう心掛けています。その結果、その事業にジェンダーの視点が取り入れられた時には、努力が報われた気がします。またその結果、事業の成果が上がったと現場から報告を受けた時は、さらにこうした取り組みを広げていかなければと気が引き締まります。

全ての人に届く国際協力を実現するには、ジェンダーの視点は不可欠です。JICAの関係者一人一人が自然にジェンダーの視点を意識し、事業に反映していけるようになることを目標に、今後も働き掛けていきます。



協力隊員として、グアテマラの国立大学で植物の病原微生物を診断する実験などに携わった



ケニアの小規模農家を支援する事業で、農家グループによる生活向上の活動を視察する後藤さん